

教育・人づくり部会における主な意見

施策	主な意見		発言者	部会
《施策1》 社会の持続的な発展 を牽引する力の定着	1	全てをデジタル化すれば良いというわけではなく、アナログとデジタルの双方の良さを伝えながら進めるべきである。	荒木直子委員	第1回
	2	デジタルリテラシー教育の中で、危機管理についても含めて指導していただきたい。	荒木直子委員	第1回
	3	「起業力」、すなわちアントレプレナーシップ教育は、「生きる力」と考えるが、自ら事業を起こす能力が、今後はより一層必要になるのではないかな。	長谷川兼一委員	第1回
	4	小・中・高の段階から、起業という可能性や、そのために必要な能力を涵養するカリキュラムがあれば、2040年という未来への一つの答えになるのではないかな。	長谷川兼一委員	第1回
	5	語彙が豊富だからといって、必ずしもコミュニケーション能力が高いわけではなく、むしろ、語彙は少なくとも、人と関わるのが好きで、積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度をもつ生徒の方が、結果的に円滑な意思疎通ができています。	荒木直子委員	第1回
	6	「グローバル化」が目指すものがインクルーシブな社会であるならば、英語以外の言語や文化にももう少し積極的に取り組む必要があるのでは。	荒木直子委員	第1回
	7	「英検3級相当」といった指標だけではなく、より多角的な視点を持たせることができるような議論の余地はあると思う。秋田ならではの特色を打ち出すことで、全国と差別化を図れるのではないかな。	荒木直子委員	第1回
	8	何のために英語をはじめとした語彙力が必要なのかという、教育の根幹にある方針をもっと前面に打ち出すべきではないかな。	長谷川兼一委員	第1回
	9	英語の語彙力や文法知識といった技能面に偏重しがちで、背景の異なる他者と積極的に関わろうとする態度や、文化の多様性を受け入れるマインドが十分に育っていないため、知識はあっても円滑なコミュニケーションが取れない状況が見られる。	野内友規専門委員	第1回
	10	秋田の学生は失敗を避けることを最優先に行動するため、社会全体で失敗を許容する文化を醸成することが、結果としてグローバル人材の育成にもつながるのではないかな。	野内友規専門委員	第1回
	11	工業高等専門学校（高専）は国の機関ではあるが、ICT教育などで地域と連携できるのではないかな。	高橋今日子委員	第2回
	12	実業高校で学ぶ生徒たちが、より高いレベルの技術を学べる環境を整備するとともに、県内企業の技術力向上のためのリスクリングの仕組みを設けるなど、高校と企業が共にレベルアップしていくような仕掛けが必要ではないかな。	長谷川兼一委員	第2回
《施策2》 生きる力をはぐくむ 確かな学力の育成	1	「あきたの探究型授業」にAIやデジタル技術にはない、人間固有の能力である「共感力」、「想像力」の育成を積極的に取り入れ、他県との差別化を図ってみてはどうか。	荒木直子委員	第1回
	2	小学校低学年、更には保育の段階から、自己理解・他者理解に焦点を当てた教育・保育のあり方を検討すべきではないかと強く感じる。	野内友規専門委員	第1回
	3	勉強も部活動も苦手で、学校に居場所がないと感じている子どもがいるので、そうした子ども達が「これなら自分にもできる」と自信を持てるような、多様な選択肢を用意することが大切である。	清水隆成専門委員	第1回

施策	主な意見		発言者	部会
	4	幼少期にトラウマを経験させないことは非常に重要であるが、そのトラウマを作ってしまうのは我々大人であり、我々自身のあり方から考えていく視点も大切である。	高橋今日子委員	第1回
	5	保育の質が低下すると、幼児期に様々な問題を抱えることになり、それが大人になるまで影響を及ぼしてしまうので、保育の担い手確保と質の向上に、より一層力を入れる必要がある。	野内友規専門委員	第1回
	6	教育実習とは別にフレキシブルな考え方で「教育インターンシップ」に取り組んでみてはどうか。	荒木直子委員	第1回
	7	デジタルネイティブである子どもたちにとって、AIを活用して作業を効率化することは当たり前であり、そうした能力は「生きる力」の一環だと考えられる。	高橋今日子委員	第2回
	8	先生方への研修を新たに設けることは、かえって負担を増やす可能性があるため、生徒から先生に対して教材や授業方法を提案したり、生徒が先生のための研修カリキュラムを作成したりする仕組みを導入してはいかがだろうか。子どもたちにとっては対話を通じた研修カリキュラム作成が探究型学習の実践にもなる。	高橋今日子委員	第2回
	9	次期総合計画案は「学力は最低限ここまで引き上げる」というメッセージが強く感じられ、その上でさらに多くの能力が求められているように見受けられる。「個性を大事に」「ありのままで良い」と学校で言われる一方で、計画では「確かな学力」に加えて、さらに多くの要素が求められており、そのギャップに違和感を覚えた。	清水隆成専門委員	第2回
	10	たとえ生徒の方がICT技術に詳しくとも、それを「学び」へと転換させる知恵は教員が持っているはずである。教員の研修も、ICT技術のみを教えることに焦点を置くのではなく、「教育活動に変換する」教員の強みを活かす内容へと見直す必要があるのではないかな。	荒木直子委員	第2回
	11	技術はどんどん進化しており、教員の役割は技術の専門家としてだけではなく、議論を導くファシリテーターとなる必要があるのではないかな。	荒木直子委員	第2回
	12	外部の専門家やICT専門の教員が生徒に最新技術を共有し、その後、クラスの教員が倫理的・道徳的な問いを投げかけることで、生徒の探究的な学びを深めていくアプローチは非常に有意義である。	荒木直子委員	第2回
	13	「なぜそう思うのか？」という“Why”の問いかけは、生徒が自分の意見の根拠を深く考えるきっかけとなり、「主体的・対話的な学び」を実現するために必要である。	荒木直子委員	第2回
	14	真のICT活用とは、ICT主体ではなく、あくまで人間主体でなければならない。教員が“Why”の問いから始め、例えばSNSの是非などを生徒に議論させる、そうした授業の進め方こそが求められていると考える。	荒木直子委員	第2回
	15	「主体的・対話的で深い学び」の考え方を教員研修で実践しようとしている。ICTツールの使い方を教えるだけでなく、それをどのように学びに融合させていくかという本質的な議論を行う研修であり、秋田県教育委員会におかれても、この方向での取り組みを一層推進していただきたい。	和田渉委員	第2回
	16	「批判的思考（クリティカルシンキング）」、つまり物事を多角的に捉え、本質を見抜く力こそが「生きる力」の核になると考える。	高橋今日子委員	第2回
	17	高校生などが保育者や教育者を目指したいと思えるような働きかけを、県として一層進めていただきたい。	野内友規専門委員	第2回
《施策3》 全ての子どもたちの 健やかな心身を育む 教育環境の構築	1	不登校やいじめについては事後対応だけでなく、教員全員が、それらが「なぜ起こるのか」という仕組みきちんと理解し、未然に防ぐための研修を受けることが非常に重要である。	野内友規専門委員	第1回
	2	教員の善意の指導が意図せず生徒のトラウマを生み、いじめに繋がるケースがあるため、教員にはこの心理的メカニズムに関する知識がより一層必要ではないかな。	野内友規専門委員	第1回

施策	主な意見		発言者	部会
	3	部活動の地域移行において学校側は事故のリスクを懸念し、自転車の利用に消極的な傾向があるが、隣の学校での活動であれば許可するなど、もっと自転車を活用したらどうか。	清水隆成専門委員	第1回
	4	子どもには多様な学び方や興味関心があるはずであり、「学び」に合わせて、学校や地域が柔軟な「空間」を提供していくという発想が必要ではないか。	和田渉委員	第1回
	5	教員の働き方改革では、教員業務の切り分けが必要なので、教員の業務範囲を明確にして、何を切り離し、どこに移管するのかをより詳細に検討するべきである。	高橋今日子委員	第1回
	6	部活動の地域移行を進めるには、地域のスポーツクラブが、制度上は部活動として認められないといったような制度的な障壁を一つ一つクリアしていくことが必要である。	高橋今日子委員	第1回
	7	県立大学では心の問題で授業に出られない学生を手厚く支援しており、高校においても柔軟な学び方を制度化すべきではないか。	長谷川兼一委員	第1回
	8	心の問題を抱える生徒の増加を見据え、単位だけで卒業が決まる硬直的な制度を改め、2040年に向け、より柔軟な制度設計の導入が必要ではないか。	長谷川兼一委員	第1回
	9	不登校対応でコミュニティ・スクールが有効に機能している事例を聞いており、こうした良い事例は県が主体となって全県に広めて欲しい。	清水隆成専門委員	第2回
	10	コミュニティ・スクールは地域の学びを継続する役割を担うが、不登校の生徒をどう受け入れるかは、各地域の状況や要望に応じて慎重に検討すべきだと考える。	高橋今日子委員	第2回
	11	不登校の子どもに最も重要なことは「学びを止めない」ことだと思う。これは無理に勉強させるという意味ではなく、子どもが持つ「知りたい」「面白い」といった意欲を絶やさないということである。	高橋今日子委員	第2回
	12	子どもの学びたいという気持ちをいかに支え、繋げていくかという視点で不登校支援を捉えることが重要ではないだろうか。	高橋今日子委員	第2回
	13	学校には行けなくてもオンラインでの交流なら可能な不登校の子どももいるはずなので、例えば、教育支援センターの職員とオンラインで短時間でも対話する機会を設け、それを「出席」と認めるような、より柔軟な考え方が今後必要ではないか。	荒木直子委員	第2回
	14	学校の課題とは別の個人の興味に基づく多様な学びも価値ある活動であると認めるインクルーシブな考え方を推し進め、不登校の児童生徒も社会との繋がりを保ちながら安心して自らの興味を追求できる環境を整えていくことが、極めて重要である。	荒木直子委員	第2回
《施策4》 地域社会の発展と産業振興に資する高等教育機関の活性化	1	県の大学全体で数名のソーシャルワーカーを雇用し、ローテーションで各大学を回るような形で結構なので、是非、大学への配置を検討いただきたい。	荒木直子委員	第1回
	2	県内の高等教育機関の学生と地域住民がもっと密接に関わる機会を、県が創出してはいかがだろうか。	長谷川兼一委員	第2回
	3	国際教養大学では、地域の企業家や学生、住民が一体となり、秋田らしい豊かさを共に創造する「ソウゾウの森会議」というものを進めており、県にも議論に参加していただき、バックアップをお願いしたい。	高橋今日子委員	第2回
	4	「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（通称：J-PEAKS）」についても、秋田県の大学が関与しており、県のバックアップをお願いしたい。	高橋今日子委員	第2回
《施策5》 誰もが生涯を通じて学び活躍できる環境の構築	1	博士課程の学生のフィールドワークの受け入れなどを通して、大学院が地域社会と接点を持つことで、生涯学習の拠点となれば、学び続けられる環境はさらに充実していくといった視点を、もっと意識すべきではないか。	高橋今日子委員	第1回

施策	主な意見		発言者	部会
	2	郷土愛や共感力を育むため、県が主導し地域全体で人々が交流する学びのプラットフォームを構築することは、極めて大切である。	野内友規専門委員	第1回
	3	秋田にはまだ祭りが盛んな地域が多く残っているので、子どもたちが地域の祭りに触れる機会を増やすべきである。	清水隆成専門委員	第1回
	4	祭りを維持していくためには、新しい人材の参加が不可欠であるので、小学校の段階から、子どもたちがもっと祭りに参加しやすくなるような働きかけが有効ではないか。	清水隆成専門委員	第1回
	5	竿燈まつりや、ブラウブリッツ、ハピネットの試合など、県外からも多くの人が集まる場合は、教育的な意味合いを持つ重要なプラットフォームである。	野内友規専門委員	第2回
	6	既存の様々なプラットフォームを活用し、意図的な学びの機会を積極的に設けていくことで、地域全体で子どもたちのオープンマインドなどを育むことができ、地域での多様な学び場に繋がっていくのではないか。	野内友規専門委員	第2回
	7	秋田県にも、公募で最優秀賞に選ばれる小学生の絵画や書道など、素晴らしい作品は多数存在するが、それらが特定の施設で限られた期間のみ展示されるに留まっているのは惜しいことである。	荒木直子委員	第2回
	8	例えば県の建物の外壁などを活用し、まち全体をアートのキャンパスとしてしまうという発想はどうか。殺風景になりがちな冬の景観にも彩りが生まれ、「アートを鑑賞しに行く」のではなく、「日常生活の中でアートを身近に感じる」という体験が可能になる。	荒木直子委員	第2回
	9	アートをいかに県民の身近なものとし、生涯を通じて学び、活躍できる環境を構築していくかということを考えた時、新しい視点もまた必要なのではないか。	荒木直子委員	第2回
	10	自分たちが作成したアート作品が身近にあることで、作品に対し身近な気持ちが生まれ、そこから「作者への敬意」や「保存の意義」が育まれる。このような考え方が文化遺産の保存へ結びつき、文化遺産を「大切に守っていく心」が育っていくのではないか。	荒木直子委員	第2回
	11	美術館や博物館といった既存の施設を、その本来の目的に縛られず、もっと自由な発想で活用すべきである。新たな施設建設には多額の費用がかかるため、既存の施設を多様に活用していく視点が不可欠である。	高橋今日子委員	第2回
	12	一つの施設やイベントを単一の目的に限定せず、複数の役割を持たせることで相乗効果を生み出していく工夫は、今後の「学び活躍できる環境の構築」を進める上で、非常に重要なヒントとなる。	高橋今日子委員	第2回
	13	施設を、単機能で捉えるのではなく、商業施設的な要素を取り入れるなど、複合的に利用していく視点が今後ますます重要になる。	野内友規専門委員	第2回
	14	まち全体が学びの場、遊びの場となり、さらには利益を生み出すような、各要素が融合した発想が、教育を考える上でも非常に大きな意味を持つ。	野内友規専門委員	第2回